

地域の歴史を語りつぐ飯田下伊那の力

—「語られない」満州移民はいかにして

「語られ始めた」のか—

片桐 陽己

長野県の南部に位置する飯田下伊那地域では、1930 年代から終戦直前までの間、中国東北部に日本の傀儡国家として建国された「満州国」(以下、満州)へ最も多くの人々が移民として送り出された。しかし、敗戦によって飯田下伊那から満州へ渡った半数が犠牲となった。飯田下伊那の「満州移民」の歴史について、例えば平和教育の題材のように、公の場で語られ始めたのは、2000 年代以降のことである。戦後以降、満州移民の体験者たちが自らの満州での体験を公に語ることはなく、語ることが憚られる出来事であった。しかし、2000 年代近辺になると移民体験者によって、満州での体験が徐々に語られ始める。本稿では、「なぜ飯田下伊那では移民体験者によって『満州移民』は語られなかったのか」、そして「なぜ移民体験者によって『満州移民』は語られ始めたのか」という問いについて考察した。

前者の「なぜ飯田下伊那では移民体験者によって『満州移民』は語られなかったのか」について、満蒙開拓平和記念館の事務局の方、移民体験者の語りの聞き取りを行ってきた「満蒙開拓を語りつぐ会」のメンバーへの聞き取り調査と「語りつぐ会」の顧問を務める研究者による論考から、満州移民が語られなかった背景を把握した。上記の三者 5 名の見解を整理すると、四つの背景が考えられる。まず、「満州での想像を絶する体験を言葉にできない」「移民体験者にとって精神的に辛い体験」「戦後社会を生活することで精一杯」といった①当人たちの内面的要因が挙げられる。次に、満州移民を推進した有力者が戦後も地域の中に残っていたこと、送出に対する責任に苦しんでいた有力者もいたことといった、②満州移民を推進した有力者の存在が考えられる。そして、移民体験者が引き揚げた際、国内に残っていた人々から「厄介もの扱い」され、「満洲帰り」と「白眼視」されたような、③体験者への否定的な眼差しがあった。最後に、他者の土地を侵略したこと、自分の子どもや同じ開拓団の人を殺した、といったような④加害の側面も満州移民は持ち合わせていた。以上、

①から④の四つの背景によって、飯田下伊那で移民体験者によって満州移民が語られなかったことを提示した。

後者の「なぜ移民体験者によって『満州移民』は語られ始めたのか」という問いについては、記念館事務局の方、「語りつぐ会」メンバーに加えて、移民体験者の語りを取材してきた長野県地方テレビ局のディレクター、そして戦前および戦中にかけて開拓移民として満州で暮らした経験のある移民体験者の方に聞き取りを行い、満州移民が語られ始めた背景を把握した。聞き取りを行った四者 6 名の見解から、四つの「語られ始めた背景」が挙げられる。一点目に、「語りつぐ会」や記念館といった移民体験者が安心して自らの体験を語ることのできる場が誕生したことで語られるようになったと考える。二点目に、安心して語ることのできる場だけでなく、移民体験者の語りを真摯に受け止める聞き手の存在が挙げられる。三つ目に、戦後から時間が経過し、当時満州移民を推進した有力者や開拓団員として満州へ渡った人々の親族がいなくなったことが関係していると考えられる。既述の三点のような外的要因以外に、戦後を生きる中で移民体験者自身に意識や心境の変化が生じたことも語られ始めた四点目として推測できる。以上のように、(1)語ることのできる場の誕生、(2)語りを受け止める聞き手の存在、(3)有力者や満州へ渡った人々の親族がいなくなった、(4)移民体験者の意識や気持ちの変化といった四点が「語られ始めた背景」として考えられる。加えて、この四つの背景はそれぞれが独立して存在しているのではなく、相互に関連し合っていたことで、移民体験者たちは自らの体験を語り始めたとは本稿では提示した。

上記の考察を通し、飯田下伊那という地域が持つ力が浮かび上がった。飯田下伊那が持つ力には、地域を盛り上げる自治的な取り組みといった「陽」の側面だけでなく、多くの満州へ人々を送り出してしまったような「陰」の側面も含んでいた。しかし戦後になると、過去と向き合い、満州移民の語りを残し語り継いでいくといった「語りつぐ会」や「記念館」のような地域の人々による自治的な取り組みも始まった。飯田下伊那には、地域の「負の側面」にも向き合い、同じ過ちを繰り返さないために動くことのできる力が備わっていることを確認した。そして、「満州移民」という一つのテーマだけでなく、本稿では深く言及できなかった「中国帰国者」「731 部隊」といった「負の側面」にも向き合いつつ、「国策」という枠組みで捉え直すことが今後の課題である。